

大学生と読書

—読書環境の変化4—

University Students and Reading

—Changes in Reading Environment Part 4—

吉田 昭子

YOSHIDA Akiko

要旨

新型コロナウイルス感染症の拡大で学校生活や社会生活は大きな影響を受けた。子どもや成人について行われてきた読書に関連した調査に関して、新型コロナウイルス感染拡大前後の読書率や本を読まない不読率の推移を調査した。各調査によって不読率の値は異なるが、大きな変化は見られなかった。現在大学に在学している大学生の小中高時代の不読率の変化に注目して追ってみると、高校生における不読の状態が大学生になっても継続している。学生は、時と場だけを設定して、読む本は自由といった朝の読書や読書タイムを体験して、大学に入学してくるが、学生一人ひとりには個人差がある。そこで、読書の時と場所を設定して体験を重ねるだけでなく、それぞれにとって、より価値ある体験となるような仕組みや支援について考え、図鑑や絵本、写真集を活用した読書活動を展開することを試みた。その結果、これまで図鑑や絵本を手にとったことのない学生も、普段から興味や関心を持っていた学生も、個人差はあるものの、一人ひとりが主体的に分析し、自分にとって「価値ある体験」として、それを活かして高めていることが明らかになった。

●キーワード：読書 (reading) / 大学生 (university students) / 図鑑 (illustrated reference book)

I. 近年の読書環境や読書調査をめぐる変化

日本国内で新型コロナウイルスの感染が初めて確認されてから、3年10か月余が経過した。2020年度初めには緊急事態宣言発令、全国一斉臨時休業等、新型コロナウイルスの感染拡大は人々の日常生活に大きな影響を与えた。しかし、2023年5月からは感染法上の分類が季節性インフルエンザと同じ5類に引き下げられ、社会生活の制限も緩和され始めた。本稿では近年の読書に関わる調査や読書状況の変化、より価値ある経験としての読書活動について取り上げてみたい。

1.1 子どもの読書環境と新型コロナウイルス感染症

子どもの読書環境についてみると、2023年3月に、2023年度から2027年度を対象とした第5次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」¹⁾が閣議決定された。2001年に成立した「子どもの読書活動推進に関する法律」に基づき、全ての子どもがあらゆる機会とあらゆる場合に自主的に読書活動を行えるよう、環境整備を積極的に推進することを基本理念として第1次基本計画が策定されてから、継続的な取組が展開されてきた。

第4次基本計画は不読率（この調査における不読率は1か月間に本を1冊も読まない児童生徒の割合）に関して、2022年度は小学校4年生から高校3年生までを対象として、小学生は2%以下、中学生は8%以下、高校生は26%以下を目標として設定されていた。全国学校図書館協議会による学校読書調査²⁾による2019年度から2022年度の不読率は、第1表のような結果であった。2021年度に減少傾向を示した不読率はどの校種でも再び上昇傾向を示しており、いずれの学校段階でも数値目標は達成されていない。2021年度にはコロナ禍においても学校や学校図書館関係者の努力や工夫が功を奏したが、2022年度は学校現場では、読書時間を取ることが難しかったのではないかという指摘も見られる。

第1表 全国学校読書調査の不読率の変化

	2019年	2021年	2022年
小学生	6.8%	5.5%	6.4%
中学生	12.5%	10.1%	18.6%
高校生	55.3%	49.8%	51.1%

また、濱田秀行による別調査³⁾では、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による全国一斉臨時休業等で、2020年度末から2021年度の初めにおける、小学校から高校生までの不読率（この調査における不読はふだん学校以外で本を読む時間がない・読まないこと）は2019年の34.4%から2020年度には38.5%に上昇した。2019年度と2020年度を比較すると小学校低学年、中学校、高等学校入学直後の学年の不読率が特に上昇したと指摘している。新たな学校環境になじみ、友人関係を形成する上で重要な時期での長期にわたる休業が生徒に影響を与えていることが考えられる。

1.2 成人の読書環境に関する調査にみる読書習慣

2023年10月に、2022年度に実施された「第21回21世紀出生時縦断調査（平成13年出生児）」⁴⁾の結果が公表された。この調査は2001年に出生した子の実態及び経年変化の状況を継続的に観察する基礎資料を作成するために実施されている。同一客体を対象として学校教育から就業に至るまでを毎年調査することで、出生時からの縦断データを整備することを目的とした調査である。2000年の第15回調査までは厚生労働省が実施していた調査を文部科学省が引き継いで実施している。

第21回の調査（2022年実施）は、29,891人を対象とし、回収率76.5%、22,872人から回答を得ている。その内訳は在学者14,614人（63.9%）、就職者5,602人（24.5%）、その他・不詳1,656人（11.6%）である。大学生は12,787人を占めている。

読書習慣に関して、第21回調査では1か月間に読んだ書籍の数の割合（第2表）は紙の書籍（本、雑誌・漫画）、電子書籍（本、雑誌・漫画）、ともに0冊と回答した割合が6割以上を占めている（第2表）。小学生だった2012年実施の第10回調査（第3表）と比較すると、本、雑誌・漫画とも0冊と回答した者の割合が大幅に増加している。

第2表 第21回調査による1か月に読んだ書籍

種類		0冊	1冊	2・3冊	4冊～
紙の書籍	本	62.3%	19.7%	12.3%	5.8%
	雑誌・漫画	51.9%	14.0%	15.5%	18.6%
電子書籍	本	78.1%	9.3%	6.6%	6.1%
	雑誌・漫画	57.3%	9.6%	11.9%	21.3%

第3表 第10回調査による1か月に読んだ書籍

種類	0冊	1冊	2・3冊	4冊～
本	10.3%	19.7%	31.9%	38.1%
雑誌・漫画	20.3%	25.7%	27.4%	26.6%

※第10回は保護者が回答している。

成人の読書に関する調査としては、1946年から家の光協会が実施している全国農村読書調査⁵⁾がある。2022年8月から9月に第77回調査が実施されている。この調査は農林業地域の読書に関する状況を調査するために行われ、調査対象は全国の16歳以上79歳以下の男女を対象として実施されている。第77回調査は1,966人を対象に郵送調査法により実施され、回収数は836人、回収率42.5%であった。

対象が限定されているが、書籍の読書率は2019年31%、2020年36%、2021年37%、2022年39%となっており、6割は読書をしていないことになる。2022年度調査を年代別にみると、10代67%、20代55%、30代44%、40代42%、50代38%、60代34%、70代31%となっている。年齢があるほど読書率は下がっている。

この他に成人を対象とした読書調査として、毎日新聞による読書世論調査⁶⁾をあげることができる。この調査も1947年以後、毎年実施されてきた調査だが、2020年と2021年は新型コロナ禍によって調査が中止になった。毎日企画サービスは2022年4月に読書世論調査の調査活動は2019年調査を最後に諸般の事情により終了すると発表した。

2019年調査⁷⁾は全国の満16歳以上の男女を対象とし、回答率は60%、有効回答は2,165人であった。全国の市町村を大都市、中都市、小都市、町村部の4グループに層別し、300の調査地点を決めて住民基本台帳から1地点12人、3600人を無作為抽出している。

この調査で読書率は45%で、不読率は51%であった。いずれも前年から横ばい状態で、3年連続して不読率が読書率を上回り、読書を読む習慣のある人は、概ね2人に1人という最近の傾向に大きな変化はないとしている。年代別にみると、10代後半の読書率は45%、20代51%、30代44%、40代46%、50代49%、60代43%、70歳以上41%を示している。読書率は50%前後で推移し、大きな変化は見られないとしている。

読書世論調査の終了については、毎日企画サービス調査部は詳細を明らかにしていない。終了の要因として、コロナ禍により住民基本台帳からの対象抽出が困難に

なったことや費用がかかりすぎることをあげている記事も見られる。72年間のデータをみると、読書率には長いスパンで見ると大きな変化はなく、「読書離れ」は起きていない。読書率、不読率については数ポイントでの上下を繰り返しているが、若者の読書離れはデータからは見えてこないという指摘も行われている⁸⁾。

II 大学生の読書環境の変化

2.1 大学生の読書環境と新型コロナウイルス感染症

大学生を対象とした生活に関する調査としては、1963年以後に実施されている学生生活実態調査がある。第58回調査⁹⁾は2022年に行われ、30大学生協(国立大学19・公立大学2・私立大学10)の9,126人を対象にしたデータが公表されている。新型コロナの影響については、2022年は大学では対面講義が大幅に復活し、様々な行動制約が緩和され、コロナ禍前の大学生活への回復傾向にある。コロナ禍で勉強スタイルが変化し、大学生の勉強時間は増加傾向にあるとしている。

2022年調査の電子書籍を含む書籍の1日の読書時間の平均は32.7分(2021年28.4分、2020年32.1分、2019年30.4分)、読書時間0分という回答は46.4%に減少している。過去5年間の読書時間の推移は第4表のとおりである。読書時間0分の不読者の割合は50%程度で推移していることがわかる。

第4表 1日の読書時間の分布(単位%)

読書時間	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
0分	48.0	48.1	47.2	50.5	46.4
30分未満	8.3	9.5	8.8	9.6	9.0
30～60分	12.5	11.8	12.4	11.4	10.6
60～120分	19.5	19.0	19.4	18.6	18.7
120分～	7.2	7.8	8.6	7.2	8.7

2.2 読書調査からみた大学生の不読率の推移

2023年度に大学に在学している学生は主に2001年から2004年生まれが多い。2011年から2014年頃に小学4年生から6年生、2015年から2018年頃に中学生、2019年から2021年頃に高校生の時代を経験している。1.1でとりあげた全国学校読書調査の不読率では第5表のように推移している。太線で示した部分はその年代に該当している。

小学生時代の平均不読率は5%、中学生時代では3倍にあたる14.8%、高校生時代では3.5倍の52%程度に増加している。第4表の大学生の読書時間0分も毎年ほぼ

50%前後で推移している。

第5表 全国学校読書調査の不読率の推移(単位%)

調査年	小学生時代	中学生時代	高校生時代
2009	5.4	13.2	47.0
2010	6.2	12.7	44.3
2011	6.2	16.2	50.8
2012	4.5	16.4	53.2
2013	5.3	16.9	45.0
2014	3.8	15.0	48.7
2015	4.8	13.4	51.9
2016	4.0	15.4	57.1
2017	5.6	15.0	50.4
2018	8.1	15.3	55.8
2019	6.8	12.5	55.3
2020	実施されていない		
2021	5.5	10.1	49.8
2022	6.4	18.6	51.1

別調査ではあるが、1.2で取り上げた「第21回21世紀出生時縦断調査(平成13年出生児)」のように、現在在学中の学生の年代の変化を追うことで高校生における不読の状態が、大学生になっても継続していることが考えられる。

III より価値ある体験としての読書活動の推進

3.1 朝の読書活動、読書タイム

「子どもの読書活動推進に関する法律」の成立から22年経過、全ての子どもがあらゆる機会と場合に自主的に読書活動が行われるような環境整備が進められてきた。一人一人の子どもに読書習慣が身につくこと、読書生活が向上することを目指した活動が展開されてきた。

1988年に千葉県的女子高校で始められた朝の読書運動(学校で毎朝、ホームルームや授業の始まる前の10分間に生徒と教師が自分の読みたい本を読む読書活動)は全国的な取組として広がりを見せた。朝の読書推進協議会が2023年5月に33,809校(小学校19,105校、中学校10,062校、高校4,642校)を対象に行ったアンケート¹⁰⁾が現状をしる手がかりとなる。回収率は10.4%、3,506校(小学校1,858校、中学校1,131校、高校517校)から回答を得ている。回答結果は第6表のとおりである。

第6表 朝の読書運動の実施状況

	全体	小学校	中学校	高校
実施している	2,854校 (82%)	1,589校 (85%)	986校 (87%)	279校 (54%)
現在は実施していない	360校 (10%)	181校 (10%)	115校 (10%)	64校 (12%)
実施したことがない	292校 (8%)	88校 (5%)	30校 (3%)	174校 (34%)

実施校によって実施方法が異なる。全校一斉、学年、学級単位等が見られ、実施日も週1回から5回、期間限定など、さまざまな方法で行われている。朝の読書を実施する上で障害になる事柄としては、時間の確保が難しい、教職員からの理解協力体制が得づらい、児童・生徒への指導が難しい、学校図書館の蔵書数が少ない等があげられている。これは、読書の機会が多様な形で実施されていることを示している。

3.2 読書タイムと学生たちの読書体験

朝の読書や読書タイムの現状を明らかにするために、筆者が担当している大学の授業で、学生74人に対して、小中高時代に体験した朝の読書や読書タイムの実施状況について、読書タイムの有無（第7表）や読書のジャンルに関する制約の有無（第8表）についてたずねた。

第7表 朝の読書や読書タイムの実施状況

	小学校	中学校	高校
有	71人(96%)	58人(78.4%)	25人(33.8%)
無	3人(4%)	16人(21.6%)	49人(66.2%)

第8表 読書のジャンルの制約の有無

	対象○	対象外×
図鑑	41人(55.4%)	33人(44.6%)
漫画	11人(14.9%)	63人(85.1%)

学生一人ひとりには読書習慣を身につけ、読書生活を向上させるように、「時と場だけを設定し、読む本は自由」といった「読書タイム」「朝の読書」を体験して大学へ入学してきている。しかし、大学生一人ひとりには個人差があり、多様である。地域・学校・家庭の読書環境も様々である。こうした状況の中では、単に読書の時と場を設定して体験を積み重ねるだけでなく、それぞれに

とって「より価値ある体験」となるような仕組みを作って、読書活動を支援することが求められている。

朝の読書や読書タイムの実施にあたり、読書の対象とするジャンルに制約が設定され、図鑑や漫画はふさわしくないという刷り込みがなされているのではないかと（第8表）。図鑑や漫画が対象外とされる理由としては、小さい子が読む本、読む力がつく本ではないからなど、既に入先観や思い込みが存在しているのではないかと考えた。そこで、図鑑や写真集、絵本を使った1つの試みを行ってみることにした。

3.3 図鑑や絵本・写真集の活用

昆虫、海の生物、植物、鳥、動物に関する、図鑑と絵本、写真集16冊を選び、大学生が自分で実際にそれぞれの図鑑と絵本、写真集を手にとってみた感想を尋ねた。また、自分ならばどのように活用したり、発展するかをまとめさせ、グループディスカッションを行った。学生からは次のような感想や意見等が寄せられた。

図鑑や絵本・写真集に対する先入観を持っている学生

- 図鑑や絵本は小さい子が読むものと考えている
- ・情報量が増える
- ・図鑑や絵本に偏見があった
- ・勉強になる
- ・新しい知識との出会い
- ・子どもの認識にいい
- ・絵本の楽しさ、図鑑の楽しさ、写真集の楽しさ
- ・作者の意図をくみ取る
- ・感じとれる、癒しになる
- ・知ることによって安心が得られる
- ・あまり見たことのない本を見たので、新たな発見
- ・図鑑の編集が出版社によって違う
- ・組み立てて読んだり、抜粋して読んだりできる
- ・それぞれの本とそれぞれの子どもとの出会い
- ・絵や写真が多いと読みやすい
- ・読むことへの抵抗をなくす
- ・絵本図鑑写真は子ども向けでなく充分大人向けになる
- ・小さい子ども達に与え、興味をもてば将来につながる
- ・小さい子が興味をもつきっかけになる
- ・本を読んでみようと思う。読まないでつまらないと決めつけずに挑戦してみよう
- ・より詳しく、楽しく、気軽に読める

発展させることができる学生

体験を発展させ、こう活用していきたいと主体的に行動することができている

- ・何も知らない人の一歩になる
- ・インスピレーションになる
- ・服やデザインに発展できる
- ・何かを作る上で参考にするために手に取ってみたい
- ・現実から創造への幅があるので、自分の製作物に面白さが増える
- ・絵や写真から読み取る力が向上し想像力が豊かになる
- ・写真や図鑑は、場面によっては作品制作に活用できる
- ・植物や動物の知恵を使って何かを創る
- ・自然界からのアイデアを基に自分の創作の幅を広げることができると思った
- ・本から受けた感性はデザインに活用できる
- ・図鑑は普段から見るほうだとは思っていたが、写真集が思ったより面白くて驚いた。1冊で1つのコンセプトがあるものはスラスラみることができるし、作者がこだわりや好きが前面に出ていて訴えかけてくるようだった。自分は見ている面白と感じた生き物や好きだと思ったポイント、構図のものをメモし、ラフスケッチで描いて自分の作品の参考にすることが多い。今後は、写真集をもっと見てみたいと思った。また、小スペースでもピックアップした写真の展示やインパクトがあるものを選んで展示することで、もっと手に取る人が増えるのではないかと感じた。
- ・写真集はカメラマンのこだわりがそれぞれにあってこういう視点もあるという発見が楽しかった。

更に発展させて自分の考えの表現できている学生

〈ネットと本の違いを感じた〉

- ・紙の図鑑は侮れない
- ・スマホだけでなく本にも手を出そう。
- ・ネットは不確かなこともある。
- ・ネットを使うと調べたい内容だけがすぐ出てくる。本を使うと知りたい内容プラス他の知識を取り込むのでメリットがある。
- ・Googleにたよっていたが、本の方が想像力や知識が豊かになる。

〈本に触れる〉

- ・まず、手に取ってみる
- ・手に取ってみて知らないことが学べる

- ・読書離れの改善になる
- ・表紙から興味をもち、内容へ
- ・絵本のワクワク感
- ・好奇心の刺激のきっかけ
- ・たくさんの角度から見るきっかけ
- ・絵本や図鑑を導入に使う
- ・リアルすぎる写真集に苦手意識をもつものと癒しになるものがある
- ・デジタル化により図鑑が進化している

〈イベントを組む〉

- ・観察ウォッチングイベントを催して本と現実を結びつける
- ・「調べる」を紹介する機会があったら、図鑑、写真、絵本を探す
- ・図鑑展のミニ展示をしてみたい
- ・紙芝居の読み聞かせをしたい

〈グループで話し合い〉

- ・読んだことのない人と共有する
- ・その本の良さを知って分析する
- ・意見交換する

3.4 考察

16冊の図鑑、絵本・写真集を用いた調査の結果から、一人ひとりの学生が主体的に考え、分析していることが見て取れる。それぞれ個人差はあるものの、精いっぱい自分の考えを表現している。

これまで、あまり図鑑、絵本や写真集を手にとったことがなく、先入観を持っていたと思われる学生からは、「本との出会い、まず実際に手にとることから始める」、「図鑑、絵本に対する先入観があったことに気づいた」、「本を読んでみようと思う。読まないでつまらないと決めつけずに挑戦してみようと思った」などの感想が寄せられた。自分の読書をふり返り、本に対して抱いていた先入観から一歩抜け出してみるものの大切さに気付いている。まずは、本を実際に手に取ってみることで、新たな発見があること、その大切さや楽しさに気づいていることがわかる。

既に普段から図鑑や絵本・写真集に関心を持っていた学生は、「作品づくりに生かせる」「インスピレーションになる」「写真集にはそれぞれのカメラマンのこだわりや意図、視点があることを発見して驚いた」などの感想

を持っている。単に絵や写真を見るだけではなく、写真家や作者の視点に立ち、その意図を読み取ろうとしている。さらに、自分自身の作品制作と関連付けて考え、発想の幅を広げることに結び付けている。

日常的にネットを使うことに慣れ、本を使うことや調べることから離れていると思われる学生は、実際に本を手にする体験を通して、「ネットの便利さにたよりすぎた」、「ネットはすぐに調べられるが、本は知りたいこと以上のプラスの情報が得られる」など、ネットと本の違いを実感し、改めて本の特性に気づいている。さらに本ならではの良さに驚くとともに、図鑑のデジタル化、本とネットを使ったこれまでとは異なった今後のアプローチの可能性について、自分なりに考えている学生も見られる。

さらに「本と現実を結び付けた観察ウォッチングイベントを開催してみたい」、「図鑑展のミニ展示をしてみたい」など、本を利用した面白いイベントの開催の可能性についての意見も見られた。図鑑や絵本、写真集をみる中で、その視覚的な特徴や美しさ、インパクトに注目し、手に取る楽しさを異なった分野でも活用してみたいというアイデアもみられた。大学生の視点に立ち、その要望を取り入れた読書環境づくりや学生のアイデアを生かした読書活動を展開することも大切である。

今回、個人での意見をまとめ、その後にグループで同じ本を手にとってみんなで検討し、みんなで意見を交換し合うという試みを行った。この過程を通じて、自分の考えと他者の考えの共通点や相違点に気づき、会話の楽しさだけでなく、新たな驚きや発見をしたという意見も見られた。

IV 読書活動の推進の必要性と今後

これまでみてきたように、学生たちはそれぞれに異なった体験や意見を持ち、それぞれに違った環境の中で成長し、新たな発見を積み重ねている。今回、絵本、図鑑、写真集を読んで感想をもつという共通体験をすることで、学生たちは互いに話し合うことのメリットも実感している。確かに一人ひとりの学生の考えに個人差はあるが、それぞれの環境に応じて、既成概念にとらわれない学生自身の成長が見られる。単なる体験ではない「価値ある体験」を積んでいることがわかる。

2020年を節目として発生した新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、全世界的な大きな混乱を引き起こした。日本も政治、社会、経済等や、人々の日常生活は多大な

影響を受けた。社会生活の制限は次第に緩和されつつあるが、今後、未知の新たな感染症や災害等の危機に遭遇する可能性もある。

今のように急激に変化する時代で、一人ひとりが自身自身で日常生活の中の課題を解決し、様々な困難に対処していくために、必要とされる資質や能力とは何か。困難にそれぞれの人々が立ち向かい、乗り越えるために、読解力や想像力、思考力、表現力等は必須である。それを養う上でも読書活動が持つ意味はますます重要性を増すということができよう。

読書が持つ意味、その重要性を改めて問い直し、単に時と場を設定するだけの読書活動推進ではなく、さらに「価値ある体験」に高めるまで追究する読書活動の取り組みを開発していく必要がある。

大学生一人ひとりの個人差は大きく、多様である。地域・学校・家庭の読書環境もさまざまである。その中で読書の時と場の体験を重ねるだけでない学生自身が「価値ある体験」を積み重ねていく活動が今、切実に求められている。

注・参考文献

- 1) 文部科学省. 第五次「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」について.
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/mext_00072.html (参照2023-10-22)
- 2) 全国学校図書館協議会. 第67回学校読書調査2022
<https://www.j-sla.or.jp/material/research/dokusyotyousa.html> (参照2023-10-22)
- 3) 濱田秀行. 小中高生の不読率について.
https://www.mext.go.jp/content/20220929-mxt_chisui02-000025251_17.pdf (参照2023-10-22)
- 4) 文部科学省. 21世紀出生児縦断調査(平成13年出生児) 第21回調査.
https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa08/21seiki/kekka/mext_00003.html (参照2023-10-22)
- 5) 家の光協会. 第77回全国農村読書調査.
<https://www.ienohikari-koubo.com/research/> (参照2023-10-22)
- 6) 毎日企画サービス調査部. 書籍『読書世論調査』発行中止のお知らせ.
<https://mainichi-ks.co.jp/m-research/> (参照2023-10-22)
- 7) 読書世論調査: 2020年版. 毎日新聞社. 2020.
- 8) 永江朗. 72年も続いた読書世論調査があったから分かること. 週刊エコノミストOnline.
<https://weekly-economist.mainichi.jp/articles/20220705/se1/00m/020/015000c> (参照2023-10-22)
- 9) 第58回学生生活実態調査 概要報告.
<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html> (参照2023-10-22)
- 10) 2023年度朝の読書アンケート.
https://www.tohan.jp/csr/asadoku/asadoku_chousa2023.pdf (参照2023-10-22)